

フレンズのつどい Part. 23



酒井信代さん(中央白いドレス)を中心にエ・カ・ラ・ポリネシアンの皆さんに拍手の嵐

癒しと感動溢れる

ポリネシアンダンスショー

8月1日 文化の家「森のホール」で

8月1日の日曜日、文化の家森のホールで「フレンズのつどい Part. 23 ポリネシアンダンスショー」を開催しました。

酒井信代さんは04年ジャパン・カウアイ・モキハナ・フェスティバルのフラ・コンベンションにおいてソロ2部門で優勝した実力派。

酒井さんが主宰するエ・カ・ラ・ポリネシアンの事務所名は「太陽の昇る場所」を意味し、一人ひとりが太陽のように輝くダンサーになるとの願いを込めたダンスのプロ集団です。かつて文字を持たなかった古代ハワイの人々は、フラダンスの手の動きやステップの一つひとつに意味を持たせ、踊ることで神話や伝統を子孫に伝えてきました。酒井さんは師匠のアンクルジョニー氏から、その伝統をふまえて、常にひとに感動を与えるものを生み出し、女性の美しさを引き出す踊りを指導され、それを目指して活動しています。

今回のショーでもこの趣旨に沿って日本人にはお馴染みの「涙そうそう」のハワイバージョン「カ・ノホナ・ピリ・カイ」はオリジナリティに溢れるもので、美しい衣装とともに故郷を愛する心をあらわすものでした。

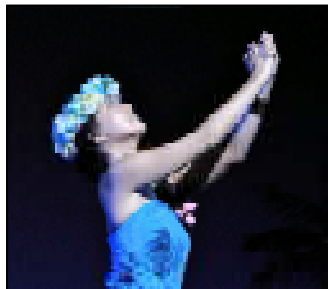


円熟と・かわいさの共演

本場でもソロ出演する酒井さんの踊りは円熟の境地にあり、踊り始めると周囲の雰囲気を一変させるほどのカリスマ性を持って魅了しました。

それとは対極に「かわいい」と、ある意味では会場の人気を独り占めした小学3年生のマオちゃんも演じる「ザ・バス・カミング」にはひととき大きな拍手が...

出演者一人ひとりの生き生きとした元気な演技は会場を魅了し、曲の合間の「MC・こころ」さんの解説が舞台の展開を心地よくつないでいく。あつという間の2時間でした。



【酒井信代さんのコメント】

フレンズの皆さんがフレンドリーに取り組んでくださり、大道具まで作っていただきました。

今日の公演では、お客さまの熱気と、暖かな雰囲気私たちに強く伝わってきて、とてもうれしく感じました。おかげさまで素敵な公演ができました。ありがとうございます。フレンズ実行委員会の方が、私を探し出していただいたおかげでこの公演が実現し、ほんとうに感謝しています。

フレンズのつどい

会場でのお客様のごえ

- ❖ 踊りが大好きで楽しみにしていました。フラのショーは初めてですが演技者の笑顔が素敵で動きも華やか、衣装も含めて女性の最高の美しさを感じました。(女性)
- ❖ 友人の娘さんが出演しています。素晴らしい会場ですネ。体験発表がありました。フラのショーをあんなに上手に組み合わせさせて踊れるなんて信じられませんヨ。(女性)
- ❖ ポリネシアンの伝統的な力強いダンスがとてもよかったです。タヒチに行ったような気分です。(女性)
- ❖ 女の子が一人で踊ったダンスが素晴らしい。舞台がフレンズの手作りだと聞きましたが素人とは思えないほど良くできてますね。(男性)
- ❖ 踊りも衣装もきれいでよかったです。MCもすてきでした。入場料もお値打ちでよかったです。(女性)
- ❖ 正直お付き合いで鑑賞したのですが、オープニングの群舞から魅せられ若々しい踊り、全員が楽しそうに踊っていました。手足の長い信代さんのシンプルな白いドレス姿にうっとり…。(女性)
- ❖ ハワイで見たものより良かった。フラを見直しました。(男性)

舞台の大道具作りにフレンズ・スタッフが汗だく!!



今回の「フレンズのつどい Part.23」では新しい試みがありました。

その一つはスタッフで大道具作りに挑戦することでした。舞台の両端後方にダンサーが登って踊る舞台(通称:お立ち台)があったことにお気づきだったでしょうか…?

このお立ち台の周囲をハワイ風の岩で囲う「大道具作り」に取り組んだのです。とはいえ悲しいかな素人集団。具体的な製作には助っ人が必要。文化の家の粗山さんの仲介で、文化の家技術スタッフ永井さんにそのノウハウを教えていただきました(写真 中央)。

シンナーの臭いにたまらずタオルで覆面し、怪しげな雰囲気ワイワイ・ガヤガヤ…。新聞紙が草に化けたり、ちよっとした一工夫で美しい花になったり…。皆さんが童心にかえって工作気分が楽しい創作の場。

本番前のリハーサル後に最後の調整。本物のやしの木、朝刈り取った蔦を絡ませ、コーナーを造花で整え準備完了(写真 左上)。出演者の方々にも気に入ってもらった大道具。公演後も使わせて欲しい…と出演者側がお持ち帰り。好評でした。

素人さんも挑戦 初めてのフラダンス

もう一つの新しい試みは「素人さんの舞台挑戦」でした。今回チケット購入者の特典は、希望者は酒井さんからフラダンスの講習を受けることができることでした。

公演の当日、2部の最初のプログラムの後に、そのサプライズが始まりました。最初に酒井さんから会場の皆さんにハンドモーションの解説があり、客席の皆さんも立ち上がり、和やかな展開でした(左写真・上)。

そして、体験者のカイマナヒラの発表。多少ぎこちない動きも「愛嬌として客席の反応も好意的」。無事、にわかフラダンサーの演技が終演。右手を斜め上に上げて、左足を引き深々と「挨拶(左写真・下)。万雷の拍手を受けて出演者の方々も満足そうな笑顔で退場。皆さん大成功ですよ…!!



富良野日記

文化の家事業係 初山勝人

この、富良野
による「歸國」公演は満
場の観客に包まれ8月
19日無事に終演した。

戯曲「歸國」が問いかけるもの

「日本はたしかに豊かになったが、日本人はどんどん貧しくなっている」「ヒンコウと言う言葉を知っているか。貧しく、幸せという二文字を重ねる。貧しくて困る貧困は避けたいが、貧しくとも幸せな生き方はできる。俺たちの暮らしはもともとそうだった」。

心を揺さぶる、魂に突き刺さる言葉の数々。倉本聰の戯曲「歸國」の一節である。

棟田博の「サイパンから来た列車」を題材に劇作家、倉本聰氏が書き下ろした「歸國」は英霊たちが今の日本の姿を見て嘆き悲しむ舞台設定である。棟田さんの本は戦後10年の話。日本も、日本人も幸せになつたと筆者の棟田さんは視ているが、倉本さんが視た今の日本は、便利と豊かさを勘違いし、心は貧しく家族をかえりみぬ社会になつたと舞台で訴えかける。そこには幸せ



戯曲「歸國」作者 倉本聰さん
撮影 趙成祐

のあり方、愛する家族、恋人に対する想いは今も昔も変わらないでいてほしい、これは普遍性を持つドラマと言いたかったと思う。

その1カ月前に富良野演劇工場（北海道富良野市）で、ロングラン公演を続けたので一足先に観に行ってきた。

梅雨は無いと聞いていた北海道だが雨続きの毎日。広い北海道、雨雲を避けながら走っているつもりががえって雨雲に追つかげられる始末。そんな雨男にも富良野だけは陽が差していた。



北海道富良野市：富良野塾入口の看板

富良野塾の方から塾を案内するから寄って行かないかと声をかけられ、ふたつ返事で付いていくことに。

手作りの見事なログハウス群

富良野塾は、倉本聰さんが私財を投じて26年前につくり上げた演劇塾。4月で閉塾

したことはマスコミなどで取り上げられていたのでご存じの方は多いと思うが、到着してびっくりしたのは、こんな山奥（失礼）にログハウス群が隆々と建っている。それもすべてかつての塾生たちが建てたものと聞いた。プロの建築家が建てたものと見間違うほど完全なるもので、塾生がカナダまで修業に行きログビルダーの資格を取り、後の塾生に建築を受け継いでいったそう

だ。数あるログハウス棟の中でもひときわ大きな棟が稽古場で、演劇工場ができるまではそこで公演をしていた。客は150名も入れればいっぱいのところだが照明設備、音響設備は充実していた。



倉本聰さん愛用 稽古場の椅子

山から下りてきてはここで飯を食べていきながら。彼らはこれからの富良野市のために生きている。いつかは恩返しに来るだろう、その時のために無償で腹いっぱい食わして欲しい。この入口の石も塾生が積み上げてくれた。彼らは立派な人たちだ、これから

も富良野塾を応援していきたい」と、毎回公演に3回（初日、中日、楽日）は足を運ぶと語っていた。

富良野塾は北の大地に還す

26年間、倉本さんと共に築いてきた塾生の活動は地域に認められ全国から富良野に観客を集めるまでに成長した。しかし、富良野閉塾とともに、彼らが築いた山の中の文化村も最後の卒塾生が去ったあとは自然に戻すと、倉本さんはこのまま朽ち果てていくことを望んでいる。卒塾生の塾を残したいという思いと、倉本さんの自然に還すという思いが交錯する。この地で過ごした彼らは、忘れ去ることができない現実に葛藤している。

このことは、倉本聰さんが書き下ろした「シングル」に通ずるものがある。自然の摂理に生きる者は自然との共生が大切。だから閉鎖後は自然に還すと、倉本さんは説く。

「歸國」の台詞からも気付かされる「人は2度死ぬ、一度目は肉体的に死ぬこと、二度目は完全に忘れ去られたとき。はたして富良野塾（文化村）は忘れ去られるのだろうか…」

倉本さんにお会いして長久手のことを尋ねると「長久手の合戦」の言葉がでてきた。長久手町は小牧・長久手の合戦で全国に知られる街だが、近年の長久手は、おしやれな店が処並ぶ新しい町、426年前に合戦場だったことは見て取れない。この地も、歴史も、先人が築き上げてきたことを忘れないように心掛けたい。

長久手オペラV.O.I. 19

G. F. ヘンデル: 歌劇「セルセ」抜粋 (原語上演/解説付き)



長久手オペラ初のバロックオペラ! 地元若手実力派を中心とした注目のキャストイングです。

10月3日(日) 15:00開演(開場は30分前)

芸術監督/大下くみこ コレペティトゥール/高橋早紀子

出演/セルセ: 大久保亮 アルサマーネ: 大川晶也

エルヴィーロ: 中野嘉章 ロミルダ: 内田恵美子

アタランタ: 後藤静香 アリオダーテ: 林隆史

アマストレ: 山川夕貴

入場料【前売】フレンズ 1,500円 一般2,000円

※フレンズは前売のみ

※全自由席 未就学児入場不可

スタッフ・ベンダ・ビリリ ジャパンツアー2010



ハンディに屈しない車イスのストリート・ロッカーズが、日本中を熱くする

コンゴ民主共和国の首都、キンシャサの動物園の敷地内とその周辺で生活する、車イスに乗ったストリートミュージシャン集団、スタッフ・ベンダ・ビリリ

ハンディキャップに負けない、希望と勇気の音楽を感じてください。

10月9日(土) 15:00開演(開場は45分前)

出演/スタッフ・ベンダ・ビリリ Staff Benda Bilili

メンバー/リッキー(Leader.vo)ココ(vo.gu)テオ(vo.gu)

ジュナナ(vo. dance)カボセ(vo)ロジエ(satonge, vo)

カバリエ(ba)モンタナ(dr, vo)

入場料【前売】フレンズ 3,500円 一般4,000円

※フレンズは前売のみ

※全指定席 未就学児入場不可

井上ひさしさんへ

尾張旭市在住のふじたこ河童

ほっとすぺーす

— お断り —
フレンズ機関紙40号での、催し物おすすめコーナーで「ステイヴン・イツサーリス チェロリサイタル」の案内を掲載しましたが、演奏者ご本人の事情で公演が中止となり、ご迷惑をおかけしました。お詫び申し上げます。

「ムサシ」のNY・ロンドンバージョンを観に
いきたかったです。日本では埼玉県の「彩の国
さいたま芸術劇場」で上演されました。先行予
約はもう終わって、一般発売で行ける目を
考えていたのですが、結局スケジュールが合
いませんでした。仕方がないので「ムサシ」の初
演のDVDを買って鑑賞しました。笑いもあり、
厳しい場面もあり、さらに日本の伝統芸能も織
り交ぜた舞台には、目が離せませんでした。そ
してエンディング…。そんな折、新聞に渡辺美
佐子さんが演じてきた「化粧 二幕」がラスト
公演を迎えることを知りました。

「化粧 二幕」は以前に読んだことがあり、
渡辺美佐子さんが演じておられるのは知って
いました。もう最後になるのだったら、と行く
ことにしました。ぜひ観ておきたかったのだ
す。会場は東京の「座・高円寺」でした。
こけら落としで昨年演じていて、600回公
演もこの劇場で行い、そしてラスト公演もこ
の場所で行うことになりました。

4月に入って間もなく、井上ひさしさんの計
報を聞きました。もう井上さんの新作は演じら
れないんだと思うと寂しくなりました。そし
て、井上さんとお会いできる機会ももうないん
だと思うと悲しかったです。しかし、その反面、
今まで残してくださった台本が、何度も演じら
れることを願いました。彼の作品にはなぜか死
が見え隠れしているのですが、でも生きている

この使命が書かれています。「化粧
二幕」のカーテンコールで渡辺さんが言っ
ていました。「いつも、井上先生はこのお
芝居を観てくれているような気がしていま
す。ほらあそこの席に座って」そう、いつ
も役者や観客を見守ってくれているような
気がしてきました。

文化の家では一昨年から、こまつ座の「円
生と志ん生」が上演されました。仕事の忙
しさと朝起きるのもしんどかったのです
が、その日の朝に予約を入れました。へろ
へろな状態で舞台を観たのですが、それが
かえって元気をもらったのです。

「どんな状況にあっても、夢を持ち続け
よう」と役者さんや、井上さんからのメッ
セージが聞こえるようでした。

今年の夏、井上さんの作品の一つである
「黙阿彌オペラ」を観にいけます。井上さ
んが上演を希望していた作品だそうです。
これから先、どれだけ井上作品を観るこ
とができるでしょうか。

編集者コラム

ヤシの葉蔭に沈む太陽、燃え盛る薪、
ホラ貝の音とともに始まる力強いポリネ
シアダンスショー。

30年前のハワイにタイムスリップし
た私…。なぜか隣にはダンスに見とれて
いる還暦過ぎのセピア色の主人が…。

真夏の夜の夢…?

(ま)